
美少女戦士になりたかった！ 天界の騎士団

葉山水晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美少女戦士になりたかった！ 天界の騎士団

【Zコード】

Z0478M

【作者名】

葉山水晶

【あらすじ】

主人公・市村うさぎは、某美少女戦士と同名なだけの平凡な女子高生。しかし、天使を名乗る美少女ギガンティスと出会い、悪魔のカケラを集める天界の騎士に指名されてから、世界が変わった！

え！美少女騎士に変身じゃなくて、美男子に変身！？性別変わってるじゃん！！

細かいことは気にしないのがベストよー。

めりやくめりや 重要じやあーーーのアホ天使ーーー！

他にも、いつかの巨乳に惚れてる変態幼馴染やクラスメートを巻き込んだり、他の騎士との出合いにより、いつかの運命が廻りだす！？ラブコメ要素ありの、コメディ時々シリアルなファンタジックヒーロー物、ここに開幕ーーー！

プロローグ（前書き）

ファンタジックコメディ物です！
楽しんでいただけたら嬉しいです。

プロローグ

小さい頃、よく見ていた美少女変身系のアニメとか戦隊ヒーロー物に憧れてた。

平凡な私が世界を救うなんてカッコイイと。

今は、そんな夢を描いてた自分を抹消したい！

* * * * *

ここは、東京にも程近い、関東にある夢見台市。程よく都会であるこの街では、近頃変わった犯罪が多発していた。それも、特定の人物たちによつて。それは・・・。

ここは、真夜中の市内にある大豪邸。とある国会議員の本宅であり、純和風の家には、錦鯉まで泳いでいる。しかし、夜中だというのに、家の周りは警官達で溢れかえっている。それは、この家に保管されていた一千万円はぐだらない絵画が盗まれたからだ。

「またこの手口か！一体何だつていうんだ！？」

指揮を執つているのは、夢見台署刑事課のトップ、雪野太郎。年齢45歳のベテラン刑事である。今まで数々の事件を解決してきた敏腕刑事であるが、この事件に関しては、まったく犯人の正体が掴めていなかつた。というのも、

「警部、詳細が分かりました。やはり、前の事件と同じく、この奇妙なメッセージカードが残されているのみで、その他の証拠が一切残つていません。」

「やはりか。・・・同じ犯人たちに違いない。しかも相当な知能犯だろう。それにしても、

“「」の絵画は、我ら天界の騎士団がいただいた”？まったくふざけた輩だ！』

そう、最近、夢見台市内で、「」の「天界の騎士団」を名乗る窃盗団による被害が多発していた。盗まれる物は、有名な絵画や壺、いわゆる芸術品と呼ばれる物ばかり。しかも、奇妙なのが、

「それで、被害者の方なんですが、犯人の顔を覚えてない上、絵画の行方などに興味はないど。なんでも衝動的に買ってしまった物で、絵画を買ってから家族が怪我を負うなどの奇妙なことが続いていたらしく、そんな縁起の悪いものが盗まれても気にしないそうで・・・。」

「「」の被害者もか・・・。」

そう、盗まれた芸術品は、被害者にとつて不幸を呼ぶようなものが多いらしく、誰も被害届を出そうとしなかったのだ。むしろ、呪われているような物を盗んでくれて、感謝したいといつ被害者まで出る始末だった。

「一体なんだつて言つんだ・・・。」

警部の咳きは、夜風の中に消えていった。

* * * * *

一方、こちらは、先ほどの大豪邸の程近くにある、とあるビルの屋上。月の光に紛れて、三人の人影が話している。

「今日はヘマせずにするんだみたいだね。それにしても、この天界の騎士団なんていうアホなネーミングはどうにかして欲しいんだけどなあ。」

そう発言したのは、綺麗な黒髪にたれ目、少しナルシスト気質もうかがえる美男子だつた。

「文句があるなら、あの馬鹿天使に言つてよーつていうが、今回も任務終わつたら早々に姿くらませるし、なんのよー！」

地団駄を踏んで叫んでいるのは、金髪に碧眼の王子様風美男子だつた。少々女っぽい言葉づかいだが。

「ユキ、地が出てるわよ。アンタは今男なんだから。自重しなさい。」

「・・・『メン。』

最後に発言したのは、三人の中で唯一の女の子。綺麗な栗色の髪を一つに高く結う、人形のように愛らしい少女である。萌え系とうか、ゴスロリが似合ひそうである。

そして、三人とも、とても変わったコスチュームをきていた。黒髪美男子は赤、王子様風美男子は青、そして、栗色の髪の美少女は桃色を基調とした、まるで、近代西洋の軍服のような、揃いの服であつた。

「ハーアーーー皆、お疲れ様ーーー！今日も良くカケラを集めてくれました！！」

「 「 「 「うわっ！……」」

すると、突然、三人の背後に人が現れた。

「ギガントディス！一体どこにいたのよ！！」

大層な名前で呼ばれたのは、名前に似合わず、金髪に緑眼をした、巨乳の可憐な美少女だ。三人よりは幼くみえるが、口調からするとそうではないようだつた。しかし、何よりの特徴は、その背中に真っ白な翼が生えていることである。

「いやあ、本部に行つてたら、予想外に引き留められちゃつてね！でもでも、天使長様も、アンタ達の働きに大変感謝されてたわ！やつぱり三人組になると違つわね！」

「ホント、機嫌がいい時とそうじやない時の差が激しいよねえ。（ボソッ）」

「・・・なんか言つた？？（にっこり）」

「イエナンデモないです！！」

天使な美少女は、腹黒女王でもあつた。

「ともかく、今日の任務はこれで終わり！変身解いていいわよ。」

そうギガントディスが言つと

「 「 「 神の御名の元に。解除！（リース）」」

三人が唱えると、一瞬光を放ったかと思つて、そこには、さつきとは異なる三人の姿があつた。

「……ほんと、性格まで変わるのはどうかと思いますけどね……。
」

先ほどの黒髪美男子が居たところには、学生服をきた、髪がぼさぼさで、いかにもオタクな雰囲気を醸し出す少年。

「それは、あんたの理想の姿になってるんだから、少しごらい変わつても当然でしょ。まあ、あたしは、あんまり変わんないからいいけどね。コスチュームのスカート丈はどうにかして欲しいけど。」

そう発言したのは、先ほどの栗色の髪の美少女の位置に現れた、黒髪ロングヘアのスレンダーな美少女である。顔立ちはさほど変わらないが、先ほどの少女より、大人びているし、なにより醸し出す雰囲気が動から静に変わったように、落ち着いたものになつている。ちなみに、この少女は校章の入つたブレザーにチェックのスカートという制服姿である。

「一人ともいいじゃない！ 性別が同じなんだから！ 私なんか、女から男になるのよ！ あんの腐れ天使のせいで……」

最後に、王子様風美男子がいたところに現れたのは、黒髪セミロングで、ちょっと巨乳な童顔の少女である。いたつて平凡な容姿のため、黒髪美少女の隣では霞んで見えるのが悲しい。ちなみに黒髪美少女と同じ制服を着ている。

「あり、だつて、うわざの希望どつりのはずじゃない？ 美形で世界を救う主人公みたいな容姿がいいつて言つたじゃない？」

「性別が変わるなんて聞いてないわよー！昔流行ったセーラー戦士みたいな美少女戦士がよかつたのに……！」

「いいじゃない？名前は同じ“うさぎ”でしょう？？」

「ううー！ギガンティスの大馬鹿ヤロー……！」

私の名前は、市村うさぎ。平凡な高校生。肌が白いから、ユキウサギとか、ユキとかよばれます。名前の由来は、昔に流行った某美少女戦士アニメの主人公から。両親もなんでそんな名前つけたのかわからんけど、そのおかげで、昔からヒーロー物が大好きだつた。

だけど、そんな大層な人にはなれるワケないって思つてたんだ。
あの金髪天使・ギガンティスに出会うまでは……！！

というか、やっぱり美少女に変身したかったよおお……！

そんなわけで、うさぎ達の物語が、今始まる！

プロローグ（後書き）

次回からは、過去主人公うさぎと天使の出会い編です。

第1話 金髪の転校生1（前書き）

第1話前半です。

第1話 金髪の転校生①

空から降ってきた金髪グラマラスな美少女との同居…？ て、なんか恋でも始まりそうな話だけど、私、女ですから…！

プロローグの時から遡ること数ヶ月。主人公・つむぎは、その日も朝から平和に登校しようとしていた。

「つむぎ、ねはよつー！ 今日も変態ロツコン野郎共から仕事やるからなー安心しのよーー！」

そう言つて、つむぎの家の隣の家から突進してきた熱血少年の名前は、雪野京平。つむぎと同じ高校でさらにはクラスまで同じという腐れ縁ぶりを發揮している、所謂つむぎの幼なじみである。

「おはよつ京平。もう朝からそんな大声出さないでよ…。といふか、平凡顔な私が変態ロツコンとかに縁なんてないって…相変わらず大袈裟なんだから。」

そう言つてやつしながら言つたつむぎに対し、

「何言つてんだよー！ お前は童顔なくせして巨乳なんていう、めちゃくちゃ俺好みの体型してんだぜー！ 他の野郎が狙わない訳がない！ つーわけで、早く俺と付き合おうぜー！」

そう言つて京平は、つむぎの肩を抱いたが

バツシーンー！

「なにがそういうわけなのよ変態！ つーか胸触らないで！ むしろ京平が私に近付かないでよ、イヤラシイ。こんの顔だけ男！」

そういうて京平をノックダウンしたあと、高校への道を歩いていく。

熱血ではなく、実はちょっと変態まじりな少年は、確かに顔は一級品だった。今時流行りの髪型に、染めた明るい茶髪。もともと色素の薄く、整った顔には厭味なく似合っていた。

京平は、学校には一時期ファンクラブもあつた程だが、本人がうさぎ以外に興味なく、しかも外見に似合わず変態じみたセクハラをうさぎに繰り返していたため、いつのまにか変人扱いされるようになりファンクラブもいつのまにか解散していた。

そんな少年は、慣れているのか、すぐに復活し、めげることなくうさぎの後を追い掛けていく。

「待てようさぎーー走つたら転ぶぞー！」

こうして追い掛けあいながら高校まで仲良く、毎朝登校するのだが、その日はイレギュラーな事態が起こったのだ。

「きやああーーそこ走つてる女ーーどいてーーー！」

突然少女の声が聞こえたためうさぎは辺りを見回したが、後ろから走つてくる京平以外、誰もいない。

すると京平の焦った声が聞こえた。

「「つわざーー上だー危ないつーー」

京平の声に「つわざーは顔を上方に向けると、顔一杯に金髪美少女が・・・

「ゴーンッ！…！」

少女といつわざーの頭がぶつかつたところ、「つわざーの意識は途絶えた。

「「つわざーーー」

* * * * *

「「つーん、あれ？天国・・・？」

「じゃなくて保健室よバカ。」

冷めた口調で話しかけてきたのは、「つわざーの友人である、城崎ユイだ。

「あつユイーおはようー。ていうより、私どうやつて学校に？確かに変な物体と衝突して気絶しちゃった気がするんだけど・・・。」

ガラッ

「「つわざーーもう大丈夫か！？俺がしっかり運んできちゃつたんだぜーー」

保健室に入ってきたのは、京平だ。

「京平が！？」

「なんでも血相変えて保健室に飛び込んできたりしいわよ。今は留守にしてる保健医がいつてた。わたしはその保健医の変わりに付き添つてたの。一応保健委員だしね。」

「ほんとびっくりしたんだからな。イキナリ道で倒れるからな。」

「え？！違うよ！京平も見たじやない！空から変な金髪の人気が降つてきてせ、私と衝突したのを！…」

「はあ？そんなの見てねーよ。いきなりお前が倒れちゃつたんだよ。だから俺が高校までとりあえずはこんだんだから。」

「お姫様だつーじだつたらしいわよ。」

「ちよつと京平ーはずかしいじやない…でも運んでくれたのは、ありがとう。」

「ぐはー…シンデレラってやつかー…やつぱお前つて俺のコト…」

「うわよ変態。」

「冷静なコイのつゝじみ。そんななか、いわせは、

（絶対あれは人だった！なのに京平は覚えてないなんて…。どうこう…）

「とりあえず、田が覚めたんなら教室行くわよ。今ならまだ一時間田に間に合ひつ。」

そうして三人が教室に戻ると、まだ担任が朝のホームルームをしているところだつた。

「おお！高村は大丈夫だつたか？ちょうど今から転校生の紹介をするところだ。三人とも席つけ。」

「転校生？」

不思議に思い、うさぎが教壇に手を向けると・・・

（あれ・・・？どうかで見た気が。）

そこに立つていたのは、とても顔の整つた美少女だつた。スタイルもモデル並で、髪の毛は金髪。まるで絵画にでてくる愛らしい天使のようだ。クラスの大半の男子は、そんな転校生に鼻の下を伸ばしている。

「今日からお前らのクラスメートになる、あまかわねな天河怜奈さんだ。仲良くしろよ。というわけで、天河自己紹介しろ。」

「はい。・・・紹介されました、天河怜奈です。気軽にレナつて呼んでください！」

そういうつて、可愛らしく笑顔でお辞儀をした。その笑顔にクラスの男子はノックダウンだつた。

「天河の席は、今入ってきた高村と雪野原の間だな。」

そういわれた転校生は、一人の元に歩いていく。

「「つむぎーー俺は外見には騙されないからーーつむぎー 筋だからなーー」

京平は、必死に「つむぎ」とアピールしていたが、

（やつぱり、どじかで・・・。金髪・・・金髪！？そつだー。朝のあのー）

「つむぎは、必死に思いだそりとこしてーいた。

「よりしぐね。雪野原くんに・・・高村さん？」

転校生が二人に話しかける。「つむぎはその声が聞こえてないようだつたが、転校生に気づき、

「ねえ、今日の朝、私達ぶつかつたよね！？」

「つむぎが言つと、「つむぎ」しか見えない角度で、転校生の顔が変わり、どじか笑顔に寒気を感じるものになつた。

「・・・違つと思つけれど？（あなたには天術が効かないのね・・・。）ねえ、高村さん、そんなことより、あとで校内を案内してくれない？まだ全部の校舎を回つたことがないの。」

「（やつぱり人違い？）うん。いいけど・・・。」

「やつたー約束ねーー！」

転校生は笑顔になつて、席についた。

（一人目は、あの女の子に決定ね・・・。）

一人、転校生は妖しく微笑んだ。

第1話 金髪の転校生1（後書き）

後半へ続く！

第1話 金髪の転校生2（前書き）

前回からだいぶ間が空いてしまいました・・・orz
やつといじれ続編です。

第1話 金髪の転校生2

謎の美少女レナといつさきは、それ以降放課後まで接触がなかつた。といつより、レナの周りにいる男子達のせいで、近寄れなかつたのだが・・・。

そんなこんなで放課後を迎える・・・

* * * * *

「じゃーな、いつさきー他の男と浮氣すんじゃねーぞ

と、京平は部活に向かい、

「それじゃあ、バイトあるから。また明日ね。」

と、コイは足早に教室を出ていき、行動がのんびりしていのいつさきは、ぽつんと一人教室に残るはめになつていた。そんないつさきが帰るひと席を立とつとした時、

「市村さん。朝言つてた学校案内を頼めるかしり?..」

と、謎の転校生が話しかけてきたのだ。

「へ、うん。喜んで! (なんだか謎な子だなあ。朝のこともあるし・・・。) 「

いつさきは、転校生を不思議がりながらも、案内することになつた。グラウンドからは、部活生の声が聞こえるが、校内は、誰も居らず、静かで少し不気味だつた。

「つかせ壇の学年棟を抜けて、音楽室や職員室などがある特別棟まで来た。

（話してみたら、明るくて普通の子だなあ・・・。朝のは見間違えだったのかな？）

などと、つかせが納得しかけ、

「ねえ市村さん。これからつかせて呼んでもいい?私のことはレナってよんでも!」

「うんーよひしくね、レナ!」

と、レナとの友情が生まれたと思つたそのとき、

ギャアアアツー！

「「「」」

「なにー?今の叫び声!ー」

「どうやら、ここにも居たみたいね・・・。つかせー叫び声の聞こえた方に案内してー!ー」

「えー?・・・」の廊下の奥だから、えつと・・・校長室かも?・・・
・・・」つちだよー!ー」

一人は急いで校長室に向かつた。

「失礼します！！！校長先生大丈夫ですか・・・？！つて」

先に入つたうさぎを押しのけてレナが中に入る。するとそこには、

グルルルルウ！

目を見開き、まるで獣のように威嚇する校長の姿があつた。

「ちょっと遅かつたか・・・。」

「レナ？…ビラリウ」と…？」

「アイツは低級の魔物なの。しかも人に憑りつくタイプのね！！」

「ま、魔物・・・！？そんなファンタジックな・・・。」

「これは現実よ…さあ、こいつを封印しなくちゃ・・・。」

「え！？どうやつて・・・？」

「まあ、見てなさ」つて…これからはうさぎにもやつてもううつてになるんだから・・・！」

そういうて、レナがぶつぶつと何かを唱えると、

「なにそれ？！剣！？」

そういつて、レナの手には、華美な装飾の西洋式の剣が握られていた。

とその時、

ガルルツ！ガウツ

これまで威嚇していた、校長に憑りついている魔物がうざぎの方に向かっていく。

「うさぎーーー」の剣を使ってーーー！」

「そしたら校長先生が・・・!」

「大丈夫だから！！早く！！」

卷之二十一

そう言つてさきは投げ渡された剣を目の前に迫つた校長に振りおろした。

ザシユツ

グギヤアアアア！！

ドサリッ

なぜか校長は、無傷のまま倒れ、黒い狼のような影が現れた。

「一體・・・？」

「そいつが憑いていた魔物自身よー！あ、切り離したから、あとは封印するだけね！そいつは弱いから、憑いてなきゃ私達には攻撃できないし、もう大丈夫。うさぎ！なんでもいいから、それらしい言葉をかけて、そいつを剣で斬るのよー！」

「なんだかよく分からぬけど、…私がやらなきゃいけないの？レナは…？」

「ホントは、うさぎには説明してからと思つたけど、経験積む方が大事だしねー！あ、早く…！」

「もうー！良く分からぬけど…なんか小さこりやつてた美少女戦士モノみたい…。よし！」

『セイント・フラッシュьюー魔よ地に帰れ！…』

ザシユツ

すると、狼もどきは光をはなち、そこには、黒い石のよつなものが現れた。

「上出来よー！とこつても、ホントに弱い低級のやつだつたけどね。」

「！」の黒い石は…？」

「それは、悪魔の力ケラ。通称ブラックルビーよ。あ、今から説明するわ…。場所を変えましょ！」

「校長先生は大丈夫なの？」

「じきに覚めるわ。魔物の記憶も残つてないだろうし。」

「それってどういって……？」

「それも含めて説明するわ。……私の正体も含めてね……。」

そう言つて・レナは校長室を出て、つさぎも後に続いた。

（一体今のはなんだつたんだ……？あの一人は……同じクラスの転校生に、市村だ！）

「これは、大スクープになるぞ……。」

そうつぶやいて、去つていったのは、カメラを首から下げた、ぼさぼさ頭の男子生徒だった。

一つまた運命が動きだす。

第1話 金髪の転校生2（後書き）

前回から更新がだいぶ空いてしまってすみません。

そんな中、読んでくださった皆さん、ありがとうございました。
大学も夏休みに入りましたので、これからは、また頻繁に更新して
いこうと思います！！

次で出会い編は終了です。まだまだ序盤ですが、頑張ります！

第一話 金髪の転校生③（前書き）

これにて、一応レナとの出来ごと編は終了です。

第1話 金髪の転校生③

化け物と出会った翌日。京介は、珍しく部活の朝練とやらで行ったらしく、うさぎは一人登校した。自分の下駄箱を見ると、一通の封筒が入っていた。中には、昨日の黒い魔物と自分達が写っている写真と、一切れのメモ。

（昨日の見られてたんだ！バラされたくなれば、放課後に報道部部室つて・・・。というか、うちの学校に報道部なんてあつたっけ？）

「とりあえず、レナに相談しなきゃ・・・。」

うさぎとレナは、人気のない校舎の裏にあるベンチまで移動してきました。

「まず、私の正体から正直にいうわね。・・・私は、天界から、悪魔対策のために送られてきた天使なの。」

「て、天使い？！そんな非現実な・・・。」

「でも、うさぎも見たでしょ？あの魔物たちは、上級悪魔たちによって創りだされたやつらなのよ。」

「……確かに、あの光景を見たら、信じなきやいけないとは思うけど。でも、天使と悪魔なんて、ファンタジーじゃあべたな対立してるんだね。」

「ベタ……まあ、先代の魔王が魔界を治めていたときは、人間界に魔物が入り込むなんてことはなかつたから、天界と魔界が対立することはなかつたんだけど……。代が変わってから、状況が変わつたの。……おそらく、今の魔王はなんらかの目的を持つて、人間界に干渉しようとしてるのよ。負の意志を持つてね……。」

「へえ……なんだか複雑そうだね。……そしたら、レナ達は、その魔物の退治が仕事なの？」

「退治するのは、主に騎士の仕事よ。私たち派遣天使は、人間界で騎士に相応しい人を選んで、自分の能力を分け与えて、騎士に任命して指令を出して、悪魔の石、つまり魔物たちの核を回収させること。それからこの人間界に来ていると言われる悪魔たちを倒して、魔王の目的を探りだすことが使命なの。」

「騎士……？それってどうやって選び出すの？」

「私たち天使の力である天術が効かない人間を見つけ出すの。さつきの校長や、朝に使つた記憶操作も天術の一つなのよ。だから、」

「こことは、私つて……！」

「そう、つさきは、私の天術が効かなかつた人間！……私の第一号の騎士よ……！」

「待つてよ！これつて拒否権は……？」

「うさぎは、人間界がどうなつてもいいの……！」（うぬづる四）

「

「（そんな庇護欲を刺激する顔されたら……！）それに（確かに、悪魔？とやらに人の世界をいよいよされるのは、嫌だけど……。」

「

「それなら決まりよ！一緒に人間界を守るのよ！」

「（なんだかいいように丸めこまれたような気もするけど。）でも、能力を分け与えるって、一体どうするの？」

「分け与えると言つても、魔物を退治するための能力を込めたアイテムを私がうさぎに授けるだけよ。あとは、うさぎの働き次第で、アイテムが強くなつていくけど。」

「それって、さつきの剣みたいな？」

「うう。でも、このアイテムは、使用者の意志によつて色々と形状が変わるの。普段はペンダントのようになつてるのよ。」

そういうて、レナはうさぎに、輝きのない宝石のようなものが付いたペンドントを渡した。

「それじゃあ、うさぎ。今から任命式を簡単にするわ。私に向かつて膝をついて。一応、私が騎士としてのうさぎの主人だから。」

「なんか、本格的なんだね。……でも、レナに仕えるつて、変な気分……。」

「形式的なものよ。……私は、騎士は仲間だと思つてゐるから。さあ、じゃあ始めるわよ。」

「うふ。」

そういって、うさぎはレナに膝をついて頭を下げる。

「純天使レナの名において、この者に力を授ける。天界の騎士として、誇り高くあれ。」

そういって、レナはうさぎの頭と、うさぎの持つペンダントに触れた。すると、ペンダントは一瞬眩い光を放つたかと思うと、直後宝石には、不思議な光が宿つた。

「これで、このペンダントはあなたのものよ、うさぎ。」

「不思議な色だね……。それに、天界の騎士って……。なんか恥ずかしいなあ。」

「まだまだ、うさぎは半人前になるけどね。この人間界には、何人の天使が降りてきてるし、それぞれもう騎士を任命して、実際に経験を積んでる騎士たちも多いから。」

「なんだか、本当に、アニメで見た美少女戦士みたい……。って、そういうえば、変身したりしないの!? 私は記憶操作なんて出来ないから、正体が簡単にばれちゃうよ!」

「そういえば、そうね。正体がばれると何かと大変そうだし……。よしーそしたら、騎士に相応しい変身が出来るように、ペンダント

に能力を上書きするわ。つむぎの希望は？」

「それって、コスチュームだけ？」

「そんなわけないじゃない、顔がばれないよ！」あるんだから。体型も顔も変わつて別人になつてもらうわ。」

「そつそしたら、顔は美形で！スタイルもよくて！それから、かっこいい衣装にして！！（クールな女主人公、みたいな！キヤー！！）」

」

「（最後のほうは、よく聞こえなかつたな・・・。）わかつたわ。美形でかっこいいのね。・・・ペンドントを貸して。」

「（・・・はつ！妄想の世界に行つちゃつてた。）う、うんー、どうぞー！」

すると、レナはペンドントに力を込める。

「はい。私が想像する姿を変身力として入れておいたから。戦う前には、『チーンジー』ってペンドントを握つて唱えるのよ。」

「わかつた。」

「・・・これから、よろしく頼むわよ、つむぎ。」

「・・・うん。私、頑張るからー魔物なんて、けちょんけちょんにしてやるわよー！」

「ふふふーーその意氣よ、つむぎーー。」

「つかさが、昨日の出来事を思い出して、ついに、教室の前まで着いた。教室の扉を開けようとするとき、背後から声がかかる。

「放課後の約束は、忘れないでくださいね。・・・クラブ棟の端ですから。」

と同時に、その声の主は素早く、つかさ達の教室へと入っていった。

（あの後ろ姿は・・・）

それは、元京介のファンクラブ会長である、宝華院祥子の幼馴染で、彼女の半ストーカーなどと噂される、大門上総だつた。

その後、登校してきたレナに事情を話すと、

「とりあえず、放課後に私達一人で会つて、記憶を天術で操作しましょ。」

そして、放課後を迎える。

第1話 金髪の転校生③（後書き）

次回からは、根暗な報道部部長、大門くんが絡んできます。変身シーンが書きたくてウズウズしてるんですが、少しだけ先にいる予定です。

天術の説明が曖昧ですみません。天術＝魔法みたいな感じで書いてます。

第2話 彼と彼女の事情1（前書き）

久々の投稿となります・・・。

呼び出した大門くんのお話1。まだ続きます・・・。

第2話 彼と彼女の事情1

「ねえ、ずっと一緒にいてくれる?」

「もちろんー僕が、祥子ちゃんのこと、ずっと守るからねー。」

「そしたら、約束! ゆーびきーつづーんまーん…」

「「ゆーびきつた! …あはははー…」」

やつ、それは幼い約束にすぎないけど、僕は、君を守るよ。

* * * * *

(つづき視点)

大門くんと約束していた放課後になつた。報道部部室は、部室棟の田立たないところにあつた。

「いーいーつづきは、大門とかいつ男の注意をひきつけておくれのよー。その間に、その男に天術をかけるから。」

「うん。わかつた!」

「よしーそれじゃ、あたしは隠れておくから。上手くやるのよ。」

そこへ、大門くんがやつて來た。

「ああ、約束通り來たわよ。」

「へえ。早かつたですね。でも、もう一人の転校生がいないようだけど？」

「ちょ、ちょーっとトイレ行つてゐのよ。でも遅れてくるから。」

「ふーん。まあいいか。君にだけでも、面白い話が聞けるだらうし。」

「その前に、今朝の写真、あの写真のデータを全て消してほしいの。その条件を飲んでくれるなら、なんでも話すわ。（レナ、まだ術かかんないのかな？）」

一方、レナは、大門から見えない位置で術をかけようとしていたが、

（天術が効かない！？そんなバカな。まさか、この男も…）

「それは、話を聞かせてもらつてからだね。」

「（どうすりやいいのよー、レナーーー）」

その時、死角となっていた場所から、レナが現れる。

「レナーーー」

「うわあ。この子も適合者だわ・・・。」

「えつーてことは、仲間になるつてことーー？」

「この子が納得してくれるならね。でも、うわきみたいに単純じゃなさそだじ。」

「単純つて！」

「「ほん。一人で何を相談しているのかな。」

「あつー。ごめんね、大門くん。でも、私達に協力して欲しいの！」

「協力？」

「アンタは、天術の効かない、騎士になれる能力を持つてるのよ。」

それから、レナは大門に、つざざに話したよつに、この前の出来事を含めて話した。

「つまり、正義のヒーローよじしく、僕にもその悪魔退治とやらを手伝つてほしいと？」

「正確には、悪魔の石の回収だよ、大門くん。」

「……どっちでもいいですよ。」

「それで、協力してもらえるる？」

「お断りします。」

「な、なんでー？」

「面倒だからにきまつてるでしょう。僕はね、スクープやらオカルト話を追うのは大好きですよ。でもね、僕自身がスクープの種になるようなことは大嫌いなんです。特に、僕に関係ない話でね。」

「でも、悪魔の力のせいで、困っている人が大勢出てくるんだよ？」

「それでも、関係ないですから。わざわざ身の危険をさらす気にはなりません。それに、正義のヒーローなんて僕の柄じゃないからね。」

「本人が、そういうならしかたがないわね。」

「レナ・・・・・！」

「心配しなくとも、写真のデータは消しておいてあげますよ。考えてみたらこんな写真、合成だと疑われるようなものだし。そんなファンタジックな話、信じる人もいないでしょうからね。口外もしませんよ。さあ、話も済んだし、もう出て行ってください。一応、話を聞かせてもらひて、ありがとうございました。」

そういうて、大門は、うさぎたちを部室から追い出した。

「レナ・・・・・良かったの？」

「ふう。しようがないわ。本人にやる気がないようじや。」

(大門視点)
パタンッ。

全く、スクープだと思ったけど、とんだ無駄足だった。悪魔に天使？正義のヒーロー？馬鹿馬鹿しい。あの二人の正体は暴けても、それに協力しろだなんて。

「ヒーローなんて、僕はなれっこないのに。」

好きな女の子一人すら、守れないのだから。

ピリリリッ

「はい、もしもし? ああ、祥子様。え? 生徒会室? 今からですか?
…すぐ行きます。」

僕は、彼女に従うことしか出来ないのだから。

第2話 彼と彼女の事情1（後書き）

投稿、遅くてすみません！読んでくださる方、お待たせ致しました。
・・。

次は、大門くんと宝華院さんの幼馴染話がメイン？かもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0478m/>

美少女戦士になりたかった！ 天界の騎士団

2010年11月23日11時17分発行